[エッセイ No.23 結婚のお祝い]

最近よく目にするネット上の記事に、「結婚式に招待されたが、お祝いはどのくらい持って行ったらいいか」とか、「もらった額が少ない」、あるいは「必ず“半額返し”をしなければならないのか」、という問いがある。ああ、日本では、いまだにこの習慣が生きているのね。冠婚葬祭にお金を「あげる」のも「もらう」のも当たり前、という習慣、というか風習？

結婚式やお葬式、お年玉、お祝い、お布施、お見舞いなど、日本では実に多くの機会に「お金」が行き交う。興味深いのは、その行為自体は全く“普通”に存在するのに、中身、つまりお金は様々な形式の封筒や袋に入っている。これは、お金は「お金」という実態ではなく、「心」や「気持ち」の表れという意味合いのためなのか。
これがいつの間にか「賄賂」や「票集めのための“実弾”」にもなっていくのだけれど、ここではそれはさておいて、一つの疑問は、日本の社会では、お金は「大っぴらには見せないもの」とみられているのだろうか。（時代劇でよく見る、「菓子折りの下に隠されたアレ」だ。） 心だから、気持ちだから、そっと包んで渡す。形を重んじる日本の典型的な例かもしれない。

私自身は、「結婚のお祝い金」に悩む機会を持つ前にドイツに留学してしまったが、日本で形式的に訪れた“義理のお葬式”では、ご霊前やお香典を持っていくこともあった。最近のお葬式のお知らせでは、前もって『ご霊前辞退』の意向や、「半返し」云々の煩雑さのためか、「頂いたお心」は様々なところに寄付されるとの言葉が添えられていることも多い。
私の両親の場合は簡単な家族葬だったし、集まった親戚などには前もって「お断り」の意図を知らせてあったので問題は生じなかったが、知り合いなどへの「喪中」のお知らせの後、困った。思いがけず、実に多くの方たちから「お気持ち」が送られてきたのだ。
さてどうすべきか。ものすごく悩んだ。結局、基本的には「お気持ちへのお礼状」を添えて、そのまま送り返させていただいたものがほとんど。返された方たちは、「ものすごく失礼」と思われたかもしれない。ここでそのお詫びとともに、「言い訳」を記させてください。
まず、長いヨーロッパの生活で、冠婚葬祭に現金を受け取ることへの抵抗感が、私には大変強かった。ヨーロッパでは、結婚や亡くなった知らせを受け取ると、必ず「お祝い」や「お悔やみ」の気持ちをしたためた手紙で返事を送る。でも「ただそれだけ」。
だから、個人的に付き合いの少なかった人の場合、どのように返事を書くか、結構

悩む。そしてお金は絶対に“包まない”し送らない。（結婚の場合は、お祝いの品を届けることはある。）
亡くなった母へ、3000円とか5000円の現金に添えて、「墓前にお花を」と心のこもったお手紙をくださった方たちのお気持ちは、そのまま有難く受け取らせて頂き、お花を供えた。その一方、（ヘンな言い方かもしれないが）、1万円から5万円を送ってきてくださった方たちの「現金封緘」には、なんの言葉も添えられていなかった。お気持ちそのものに、多い、少ないはないと思うし、日本の風習に「手紙」を添えることはあまりないのだろうから、気にする私の方がおかしいのかもしれない。でもここで言いたいのは、「金額」の高低ではなく、まさに「気持ち」の問題で、「義理」で行き交うお金の虚しさを、私が勝手に深く感じすぎてしまうということだ。これが「失礼」の言い訳です。大人げないかもしれないが、「ヨーロッパ風にオカサレタ私」と思って、どうぞお許しいただきたい。

私の経験した限り、欧米では「お金」は「対価」を表すものであり、チップだって、サービスに対する「評価」なので、ものすごく大っぴらに渡す。
例えば、フランスでコンサートに行くと、ホールの席に案内してくれるスタッフに、皆、実にスマートに手にチップを握らせる。うまく渡せるようになるまで、私は結構時間がかかった。「手に直接お金を握らせる」という行為に、長いことなぜか何となくウシロメタイ感覚がつきまとった。でも少しずつ慣れていくものだ。職人さんが家に作業に来てくれると、費用以外に、帰るときにいくらかの“感謝”を手渡すのも、ごく普通にできるようになった。「ほんのコーヒー代に」とか言う言葉とともに。

ドイツで「対価」として扱われるお金のシーンを一つ紹介しよう。
個人レッスンを受けた先生への、そのレッスン代の受け渡しの際のこと。ある日本人の女性が歌のレッスンを受けた後、ドイツ人の先生に「御礼」として、“日本風”に封筒に入れたレッスン代を、そっとピアノの脇に置いたそうだ。
そうしたら先生、「アラ、こんなきれいな封筒、もったいないじゃない？！」と中身を出して、カラの封筒を返してくれたとのこと。
もちろん実用的だし、隠す必要もない、レッスンに対する正式な「対価」なのだが、何だか余りにもドライで味気ない感じが、と彼女は呆気に取られていた。

ところで、ドイツなどでの結婚のお祝いは、ではどうするのか？
これは本当にうまくできている、便利なシステムだと、常々感心している。
結婚する人たちは自分たちで、例えば、揃えたい食器やグラスの一大セット（6人分やら12人分）などを選んで、あるお店と契約をする。お店はそれを「〇〇様の結婚祝い指定品店」として、店先で公式に告知する。様々な大きさのお皿からティーカ

ップ、カテトラリー、グラス、セット商品にはたくさんの種類があって、お祝いを送りたい人は自分の予算に合わせて、その中の「何か」やいくつかを選んでお店に支払う。
誰が何をどのくらい贈ったか、などはほかには誰も知らされないしわからない。贈られたカップルには、プレゼントした人の名前のリストのみが渡る。式に招待されている、されていないは関係ない。「お祝いをあげようと思う」か、がポイントだ。結婚する人たちは必要な、欲しいものが手に入るし、贈りたい人たちは悩まずに済む。もちろん、それぞれ自由に考える人もいる。「契約品」が“売り切れ”になってしまっている場合は、花瓶を贈る人も多い。普段のホームパーティに招待されたりすると、花束を持参する習慣があるので、いくつあってもいい品だ。

そして結婚式の招待客への「引き出物」は、ない。実家の片付けをした時を思い出す。押し入れの中から、これでもかこれでもかと、数えきれない「引き出物」の包みが出てきて、処分に苦労した。それも包装されたままのものがほとんどだったので、まず中身を確認。何ペアものコーヒーカップセットやらお皿、20本近い傘の数々。すべて未使用とは言え、何十年も前のものばかりで、それらの箱に埋もれて私は座り込んだ。
今だったら、「メルカリ」などを利用して使ってくれる人を見つけることもできたのだろう。ほんの15年ほど前は、ネットを使ってものを整理するなど、考えられもしなかったのだ。便利な世の中になりました！